

ロシア資料による鹿児島方言の史的研究

久保 蘭, 愛

<https://hdl.handle.net/2324/1440982>

出版情報：九州大学, 2013, 博士（文学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（3）

論文題目 ロシア資料による鹿児島方言の史的研究氏名 久保 蘭 愛

論文内容の要旨

本論文は、鹿児島方言の史的研究である。方言史の一端、特に動詞とその文法カテゴリが歴史的にどのような変遷を辿ったのかを明らかにすることを目的とした。その際、資料に現れる現象を現代方言とのつながりの中で捉えること、できる限り中央語史も視野に入れて論じること、本論文の成果により、扱う資料の文法研究への有用性を示すことを目指した。

日本語史研究において、資料の豊富さによってこれまで中心的に扱われてきたのは中央語であった。しかし、中央語だけが日本語なのではなく、方言も含めて日本語であり、その歴史は方言にも存するはずである。ただ、方言は、それを反映する資料の乏しさによって、文献からの史的研究は多くない。本論文の特色は、こうした状況を踏まえて、これまでにあまり明らかにされることのなかった方言の歴史を考察するところにある。鹿児島には、偶然によって生まれた方言文献、ロシア資料が存在する。これは、18世紀前半にロシアへ漂流した鹿児島の少年ゴンザが関わって成立した、ロシア語と日本語（鹿児島方言）の対訳資料である。本論文は、わずかながらも残る方言文献を用いて記述をすすめた。

本論文は、序論、具体的な考察を行った1章～7章、そして結語によって構成される。序章では、本論文の観点及びロシア資料の特色及びそれによるこれまでの研究、そして本論文の立場などを述べた。

1章では、動詞の活用の整理を行うとともに、特に上二段及び一部の下二段活用動詞のラ行五段化について報告した。五段化に関して、上二段動詞に一段化の進行が伺え、五段化が見られないこと、下二段動詞「ヌル（寝る）」には一段化が見られず、その一方で五段化している例が存在することから、上二段動詞と下二段動詞では五段化の過程に違いがあることを指摘した。その要因として上二段と下二段の環境の違い、つまり、上二段は非有力な活用のタイプであり、一段化する際に統合可能な上一段が存在したこと、下二段は有力な活用のタイプであり、下一段活用が存在しなかったことという両者の違いが考えられることを述べた。

2章から4章はアスペクトに関する論である。西部日本諸方言は、中央語と異なるアスペクト体系を持つことが知られる。本論文では「テアル」「テオル」「オル」及び「トル」について、対応するロシア語文及び日本語訳の解釈から各形式の意味を分析した。

2章では「テアル」「テオル」について論じた。「テ+存在動詞」形式に関して、逐語訳によって生じた形式を除いたものが補助動詞として機能していること、補助動詞のうち、「テアル」は主語が動作を受けて

存在することを表す、受身に近い意味を持った形式であること、「テオル」は已然態に類する「状態」を表す形式であることを指摘し、それぞれ現代方言につながる意味を持っていることを述べた。また、中央語との比較によって、鹿児島方言の「テオル」が同時代の中央語「ている」よりも文法化の進んだかたちであること、その要因として中央語と鹿児島方言を含む西部日本諸方言の存在動詞体系の異なりによる可能性があることを述べた。

3章では、「テオル」「チョル」「トル」の3形式について、それぞれ対応するロシア語動詞の意味や各形式の振る舞いから、「テオル」「チョル」はいずれも已然態に類する「状態」を表す形式であり、規範意識の差も見られないこと、「トル」は現代方言に見られる完遂を表す複合動詞後項の「トル」につながる形式であることを述べた。

4章では、ロシア資料及びその前後の方言文献に見える「動詞連用形+オル」を分析し、「～オル」が現代につながる進行態及び過去の習慣の意味を持っていたことを述べた。また、現代方言では同じ機能を持つ形式が「～ゴッ」という形で現れる。これは、語中のオの音価がかつて[wo]であったために軟口蓋化を起こした結果生じた形態であると論じた。

5章及び6章は、否定に関する論である。日本語における否定の形式は、通時的・通方言的に見て、バラエティに富み、その歴史的変化も激しい。それゆえ中央語、現代方言の記述も多く存する。その一方で、「否定」という、言語表現において基本的かつ主要な文法カテゴリであるにも関わらず、そもそもどのように形成されたのか、その素材さえはつきりしないものも存する。本論文では、鹿児島方言の否定形式を例にとって史的観点からの考察を行った。

5章では、ロシア資料に見える否定形式の体系を記述するとともに、過去否定形式「チャッタ」が現代までに「ン」を伴うようになる現象を報告し、この現象が鹿児島方言の他形式にも見られること、他方言にも現れる現象であること、要因として否定とテンスを分析的に表示しようとしたためと考えられることを述べた。

6章では、過去否定形式「チャッタ」の出自について考察を行った。従来の研究では打消「ず」に「あり」を付接させたものと考えられてきたが、ロシア資料の表記から、破裂の素性を持つ形式に由来すること、その出自として連用中止形の否定形式「デ(ヂ)」に「あり」を付接させたものが考えられることを述べた。また、そのように考えることで、九州方言全体の過去否定形式のバリエーション相互の関係も捉えやすくなること、コピュラとの形態の類似も説明できることを論じた。

7章では、「動詞連用形+サマニ」が中央語と鹿児島方言、それぞれにおいてどのように展開したのかを考察した。中央語の「～サマニ」は、「ニ」を伴うことで物事の様子を表す「～サマ」が副詞的に働くようになったものである。前接動詞の広がりによって、【付帯用法】から、前件と後件が同時であることを表す【同時用法】、前件終了後すぐに後件が生じる【即時用法】が生じたことを述べた。また、中央語の「～サマニ」に由来する鹿児島方言の接続助詞「セー」は、中央語と類似の意味用法を保持しつつ、本方言で独自に発展したものであることを述べた。

結語では、これまでの論をまとめるとともに、今後の課題について述べた。本論文の考察によって次のような成果が得られたと言える。まず、これまでほとんど明らかにされていなかった鹿児島方言の文法史の歴史の一端を明らかにした。また、本資料は音声・音韻研究に用いられることが多かったが、本論文によって、文法研究への有用性も併せて示すことができた。

今後の課題としては、個々の形式についての扱いきれなかつた点及び他方言への寄与が挙げられる。本論文で扱った形式は、他の九州方言でも広く用いられているものが多い。本論文の結果を踏まえ、各地の記述や残る方言文献の精査により他方言の史的研究にも寄与できること、また、方言史の記述がすすめば、中央語史の諸問題についても何らかの手がかりを得られる可能性があることを挙げた。